

NEJIREBANE, No. 84, 30. Sept., 1999



林 匡夫氏を偲んで
宮武頼夫

昨秋、カミキリの大家、林 匡夫氏が亡くなられて、もうかなりの時が過ぎた。大阪の虫屋といってもよい、地元でさまざまな活動をされた同氏を失ったことは、かえすがえすも残念である。心から追悼の意を表したい。林 匡夫氏と初めてお会いしたのは、私が大阪市立自然科学博物館（現在の自然史博物館の前身）へ、1967年に就職した頃なので、おつき合いはかれこれ30年の長きにわたる。専門が違うので、色々細かいおつきあいではないが、博物館へはよく来られて、お会いする機会も多かった。最初のころは、年齢もかなり離れており、有名なカミキリの専門家でもあるし、あまりお話をしなかったように思うが、先生からは色々話しかけて下さった記憶がある。博物館へ来られる度に、カミキリ関係の別刷をよくいただいたが、右肩には丁寧な筆記体の英語で宛名と謝意が記されていた（付図を参照）。おそらく館へ行こうと思われると、訪問前に書かれたのであろうが、万年筆で書かれたその丁寧な文字に、先生の大変几帳面な性格がにじみ出ているように思われる。一度、収蔵庫で標本をご覧になった時に別刷をいただいて、うっかりそこへ忘れて放置したままになっていたことがあった。その後、また標本を見に入られた時に発見して、苦笑されたのではない

*To Mr. Y. Miyatake
With the best compliments
of the author*

Some Longicorn Beetles of Nepal (Col. Cerambycidae)
as the Results of the Lepidopterological Research
Expedition to Nepal Himalaya in 1963, Part II.*

By MASAO HAYASHI

かと、赤面したことである。

林 匡夫氏には、大阪市立自然科学博物館の創設に関して、大変お世話になったとお聞きしている。戦後間もない1950年に、地元の研究者の応援で自然科学博物館建設の予算がついたものの、その年の秋に大阪を襲ったジェーン台風の被害が大きく、予算が吹っ飛んでしまった。とりあえず天王寺公園にある市立美術館に間借りして、11月に2階廊下で展示を始めて、やっと産声をあげ

ることができた。1955年には自然科学博物館後援会(現在の自然史博物館友の会の前身)が発足して、なんとか建物を持った自然科学博物館の建設をと、強力な応援が始まった。林氏はその有力メンバーで、後援会の会誌「NATURE STUDY」の1巻3/4号(1955)に、賛助会員になった記事が出ている。林氏をはじめ、後援会のリーダーの方々の活躍は内外ともに活発で、野外観察会の指導をしたり、会誌に色々な普及記事を執筆されている。この頃は博物館独自の建物がなかったため、活動はいきおい野外の行事や調査が主になり、その後の個性的な博物館活動の基礎が築かれたと思われる。上記の「NATURE STUDY」の号にも、林氏は「ホテルを殺すな」という記事を書いて、都会の子どもたちへの贈り物としてのホテルの大量採集は大量殺戮につながる--と警告を発している。また、同号には「動物の冬越し」や「森林の昆虫の研究」についての、普及的な報文を書かれている。1956年の2巻11号には、「北山峡の甲虫類(7)」として、カミキリムシ科、コガネムシ科などのリスト(調査結果)を上げられ、また、「博物館にある珍しい標本」のシリーズで、ヤマトヒメハナカミキリを紹介している。このほかの号にも、毎号といってもいいぐらい記事が出ており、その御活躍ぶりが偲ばれる。2巻3号(1956)には、「執筆者の紹介」として、同氏のプロフィールが紹介されている。内容が興味深いので、同会の了解をとってここに転載させていただいた(付図を参照)。掲載されている写真も30代半ばの頃のなので、大変若々しい。

その後、自然科学博物館は1957年に西区靱公園にあった旧靱小学校の校舎へ移転し、翌年から開館して本格的な博物館活動が開始された。1958年の「NATURE STUDY」4巻1号には、館員と後援会の主力メンバーによる「博物館問題検討会」が持たれた記事が出ており、林氏のほか、緒方正美氏、大倉正文氏、河野洋氏等のお名前が出ている。後援会も博物館創設の役目を果たしたので、「大阪自然科学研究会」と名を変え、林氏にはずっと評議員をお願いした。これは博物館が、1973年に長居公園へ移転し、翌年から「大阪市立自然史博物館友の会」となるまで続いた。その間に、私が自然科学博物館へ就職して林氏にお会いし、おつき合いが始まったのである。2階の木の床がきしむ昆虫・植物研究室へ来られて、日浦氏とお話しされていた様子を懐かしく思い出す。また、同定会などの席では、やさしく依頼者に話をされていた。

1993年4月に、初宿成彦氏が甲虫担当学芸員として自然史博物館へ就職されてから、彼の方が林匡夫氏と会う機会が増えてきた。一度、日本甲虫

執筆者の横顔(6)

林 匡夫氏

大正9年船場の古い呉服商の長男に生れ、偕行社附小・北野中を卒業。現役兵及び戦時中の数年を除いた以外は家業を継いでいる。中学時代から



甲虫類に興味をもち、大林一夫氏を知ってから特に好きな天牛類を系統立てて研究するようになった。其後20年余、戸沢信義氏を初め先輩知友の知遇を得、大林氏と協力して日本の天牛相を明かにした。又分布・生態などいわゆる nature study 的要素から従来の分類を見直すよう努力していて、その片鱗が「カミキリムシの話」「原色日本昆虫図鑑上」などの著にみられる。戦後友人と共に近畿甲虫同好会を創立、機関誌「昆虫学評論」の編集を担当。アマチュアの協力ながら国内国外に異色振りを知られるに至った。海外の専門学者から贈られた専門文献が何よりの財産という。気がよくて世話ずき、正義感の強い船場のボンボン。5尺5寸、16貫。趣味は洋楽古典・文楽・落語・文学・映画・美術等の観賞。気がむくとスケッチを楽しむ。食道楽で右も左もいける。現住所 住吉区墨江西3の71

NATURE STUDY 2巻3号より

学会の例会の席上で、御自身がお持ちの標本や文献などは、いずれ整理して自然史博物館へ寄贈したいというお話をされたとお聞きした。長年蓄積された標本や文献のコレクションは、ご自身が創設に尽力された博物館へ置きたいという思いになられたのであろうか。正式には、1997年12月14日に自然史博物館で、日本甲虫学会の大会が開かれた際、ごあいさつした折にお申し出を受けた。私がまだ館長でいる間に、是非申し出たいとの配慮があった由にうかがった。有り難くお受けするが、標本などは急に手放すと淋しくなるので、ゆっくりと楽しみに整理してからでいいですよ、と申し上げたことだった。この日は冒頭に館を代表して挨拶のスピーチをして欲しいと依頼を受けていたので、日頃会員の皆さんに色々お世話になっている謝辞と短い歓迎の言葉を述べたが、その後、林匡夫氏が色々と話され、その中で「カミキリなどの資料は、無償で博物館へ寄贈します」と、参会者の前で改めて表明された。

まさかその事が、すぐ現実になるとは思いもしなかったが、昨年10月5日に突然に急逝の報に接し、呆然としてしまった。翌日、お通夜におうかがいしても、なかなか真実とは信じ難かった。あれだけお元気そうだったのにと、前年末の印象が忘れられなかった。数年前に最愛の奥様を亡くされ、やはりお独りで無理をされたからだろうか、無理矢理結論づけるしかなかった。その後、運営委員の林 靖彦・野村英世・伊藤 昇の各氏等のご尽力もあって、ご遺族の同意も得て、氏の遺言通り、全ての標本と文献は、博物館へ運ばれた。博物館側では、金沢 至・初宿成彦両氏が引き取りの諸務に当たった。一部借用標本の返却などがからんで少し揉めたようであるが、貴重な標本（タイプ標本も多数含まれる）と文献が、全部館へ収まったことは大変有り難く、有意義である。林匡夫氏をはじめ、お世話になった各氏に感謝したい。この貴重な膨大な資料は永久に保管されて、将来の研究や教育のために活用されることであろう。整理が進められ、新しく建造中の収蔵庫に収められるだけでなく、いずれ市民には何らかのかたちで紹介されることになる。故人の遺志に沿うよう、できるだけのことをしていきたいという思いがある。

白髪になっていたとはいえ、とても顔色が良かった林 匡夫氏が、底太い声で「こんにちは」と、今にも笑顔で現れそうな気がしてならない。心からご冥福をお祈りする。 (みやたけ よりお)

カミキリムシ博士・林 匡夫先生を偲ぶ*

渡辺弘之

林匡夫先生に初めてお会いしたのは、多分、昭和32年、私が高知大学農学部へ入学した年であつたろう。若い学生が一人で訪ねたはずはない。よく覚えていないが、高知大学農学部の小島圭三先生のお供をしたにちがいない。それを機に、郷里浜松への帰省のたびごとに、大阪で途中下車し、採集したカミキリムシを持って湯里のご自宅へうかがった。奥様もご健在であつた。当時、虫キチ、カミキリムシ大好きだった私だが、学生ながら日本産カミキリムシに2種をつけ加えた。北海道足寄でとったムネモンチャイロトラカミキリ(*Xylotrechus hircus*)と沖縄国頭ヤンバルで採ったオキナワヨツスジハナカミキリ(*Leptura ochraceofascia watanabei*)である。前者はソビエト・沿海州などに分布する種だが、北海道にもいることがわかったもの、後者は新種として記載されたが、現在ではヨツスジハナカミキリの沖縄亜種として扱われているものである。いずれも、林先生によって、同定・記載されたものである。

昭和36年4月に、京都大学大学院に入学してすぐにも訪ねている。このときお会いした証拠が手元にある。もう廃刊になったのだろうが「随筆サンケイ」の4月号だ。この中に、特集・珍博士誕生というのがあり、「カミキリ学を進めた人々(カミキリ博士)」というのを呉服商・林 匡夫の肩書で書か

れている。北海道大学から農学博士の学位が授与され、名実ともに「カミキリ博士」になられた時であった。呉服屋への学位授与は本当にうれしかったようで、送られてきたばかりのこの随筆サンケイを見せてくださったのである。おいとましたあと、私もさっそく買いに行ったということである。阪急百貨店書籍部のカバーのついたこの本がでてきた。大阪と京都と近くなったのだが、私の研究課題は森林の土壤動物に移っていた。京都大学の助手になって、昭和41年から6年間、福井・京都・滋賀の県境にある京都大学芦生演習林に赴任した。眼の前に珍しいカミキリムシがいるのだから、カミキリ熱が再発し、このカミキリムシ目録を作ろうと思って、かなり熱心に採集した。ここに勤めている間、一度、あるいは二度だったかも知れないが、林先生が芦生へ来られた。最近になって、関西自然科学研究会の会員に、「林先生と一緒に芦生へ行った、若い日の渡辺さんに会っています」といわれたので、何人かで来られたようだ。カミキリムシ採りのこともよく覚えていない



第683回例会「軽井沢の自然観察会」での林先生と私

が、林先生はみつけたものすべてを採集される方ではなかった。たくさんの珍しいものを見ておられただけに、先生にとっては、どれも普通種だったのかも知れない。先生のご自宅にあった標本箱をみせてもらっても、虫マニアのように一箱に一種類だけがびっしりということはないようだった。京都に来て以来、私はひんぱんに東南アジアの森林調査に出掛けるようになった。それでも採ったカミキリムシだけは大事に持って帰り、林先生に差しあげた。かなりの数になったはずだが、新種として名前をつけてもらった覚えはない。森林調査の片手間にとったもの、どれもすでに記載されているものだったようだ。1979-81年当時は年に数カ月ずつ何度かタイに調査にでかけた。懇意だったタイ王室林野局の昆虫学者ダムロン(DUMRONG CHAINGLOM)博士が標本室に保管されていたカミキリムシを預かって帰り、林先生の同定が終わったものを持っていくという役割を果たした。この中からいくつかの新種がみつき、ダムロン博士を記念して、*dumrongi* などの名がつけられた。

だんだんと回数は少なくなったものの、林先生から達筆のお手紙が来た。京大農学部や理学部にある古い学術雑誌の中のカミキリムシの論文をコピーして欲しいというものである。やっと探し当てたものの、分厚い本が多くきれいにコピーができなかったが、それを持って大阪城南女子短期大学へうかがったこともある。大阪城南女子短期大学教授・副学長、日本甲虫学会常任幹事、そして関西自然科学研究会会長としてのご活躍は会員の方々もよくご存じであろう。

そんな中、「大阪へくることがあれば寄って欲しい」といわれ、うかがったら「関西自然科学研究会」のお話だった。昆虫学を修めたわけではありませんとちょっと躊躇したのだが、平成5年11月の笠置山の観察会にご一緒したあと5年12月から理事をお受けした。林先生とのご縁が、私と関西自然科学研究会との縁になった。先生は名誉会長として退かれたが、理事会や7月の特別例会でお会いすると、私が差しあげているカミキリムシに関係のない論文や雑文にコメントしてくださった。最後にお会いしたのは、3月末、大阪市立大学での会議のあと、夕方にうかがったときだ。台湾旅行にでかけるまえで、準備のできたスーツケースがおいでであった。「一緒にご飯にしよう」と引き留められ、いつも行かれるレストランへお供した。「会誌・関西自然科学に原稿がありません、思い出でも書いて下さい」とお願いしたら、「何ぞ書きましょう」といつてくださった。達筆の原稿が、来ることを心待ちしていたのに、調査のため訪れていた屋久島で悲報を聞いた。もう少し、時間をつくりお話ししたかった。ご冥福をお祈りする。

(わたなべ ひろゆき)

* 許可を得て『関西自然科学』第48号2-3(1999)より転載。

林 匡夫先生の思い出

穂積俊文

近畿甲虫同好会の発足は1946年であった。私は早速、大倉正文氏(故人)を通じて入会をした。その頃から天牛の論文を沢山書いておられ、お手紙を差し上げたりした。ある時、カエデの花から大きな*Lemura*を採集して、お送りしたらアカイロニセハムシハナカミキリとお返事を戴いた。西村氏の発見と関氏の記載の時間差についての話は、数年後に誰からともなく噂話として聞いた。近畿甲虫



林先生(右) 中條道崇氏(中) 穂積(左) 第29回大会 (1972.12.4)

同好会の大会は1949年から毎年行われ、私は1951年11月23日の第4回大会に初めて出席した。会場は天王寺美術館貴賓室で、狭い部屋で初にお目にかかった。以来、大会に出席すると必ずお目にかかり、天牛のお話を承った。1960年頃、御堂筋の東亜紡織本社に後藤光男氏(故人)を訪ねたことがあった。その時、林先生が反物を担いで入って来られた。この年、大阪で日本昆虫学会が開催され、その話のようだった。そして、私は初めて先生の職業を知った。長居公園の市立自然史博物館に大会が移ってからも、

私はよく出かけた。1965年に大阪城南女子短期大学の教授に迎えられてからも、沢山の論文を発表されて一番脂の乗り切った時代であった。1985年秋、日本昆虫学会が名古屋大学で開かれた。名古屋昆虫同好会では、毎年10月に虫供養を行っていて、丁度同じ時に重なり林先生が、飛び入り参加された。その時先生の家庭を知り、時々某宗教で虫供養をわが家で行っていると話された。晩年、膝を患われて歩行も苦しい生活と聞いていた。あの地下鉄長居駅から博物館会場までの、痛々しい歩き方をされる光景が目には焼き付いている。既に奥様を亡くされ寂しい晩節であった。1997年12月14日の大会でお目にかかったのが、最後だった。御冥福を祈る。(ほずみ としふみ)

林 匡夫さんの思い出

岸井 尚

一昨年の大倉さん・石田さんの不慮の災害による急逝に続き、今また本会創設者の一員であり、長く会長職を勤めてこられた林 匡夫さんの訃報に接し、時の流れの早さと人生の儚さを強く感じ、我にもあらず自己の年齢を数えた次第です。震災後の混乱時も、会の運営面など雑多な仕事を適宜に片づけられ、そのお元気な姿を拝見していただけに、昨年10月5日夕刻に林 靖彦さんから電話でそのご逝去の報に接したときは、一瞬声を失った次第でした。

私が林さんのお名前を知ったのは、もう半世紀も昔の昭和24,5(1949,50)年頃のことです。先の大戦後まで中学時代を本州北端の青森市で過ごしていた私は、戦争中も昆虫の蒐集に明け暮れるという、当時ではいわゆる非国民扱いされるような毎日を送っていました。敗戦の翌年3月中旬に猛吹雪の中を出発して、陽光のうららかな京都へ転居してからは、カミキリムシに多大の興味を抱き、初めて採集する種類に感激しつつコレクションを増やすことに熱中していました。西京大学(現京都

府立大学)の徳永雅明教授のもとで応用昆虫学の学問に入ってから、そちらは殆ど無関心に近く、もっぱら同室の虫仲間であったKT, AN, OM, MK, SI 君らと虫談に時を費やしていた時、大阪に大変なカミキリムシやさんがいるとの話になり、一度その標本など検分に参加しようかなどと生意気なことを言っていたのが現実になり、確かKT君とAN君共々、大阪の船場に近い林さんのお店に参上しましたが、今となってはその確かな日時までは記憶に残っていません。しかしその時、和服で角帯の林さんに驚いたこと、丸帯のご商売をされていたこと、帳場の後ろの壁一面は甲虫用の桐製印籠標本箱が積み重なっており、ご商売の丸帯は



後列右より後藤光男、河野洋、上野俊一、阪口浩平、岸井尚、前列右より伊賀正汎、大倉正文、戸澤信義、中根猛彦、林匡夫の各氏(敬称略)
(Jan.23,1955 at New Osaka Hotel)

横の目立たぬ所に申し訳程度に陳列されていたこと、そして標本箱の中身には完全に圧倒されたことなどは、現在でも強烈な印象として思い出されます。

このときを境に、私は密かにカミキリムシの方からは手を引き、そのころ名古屋大学から生物学担当で赴任された、近代日本甲虫分類学発展に最も大きな影響を与えられた中根猛彦先生のサジェッションに従い、主任教授徳永先生のご意志と指導に反し、コメツキムシと共に歩む人生を選んだ次第でした。しかしカミキリムシに対する怨念は絶ちがたく、今もってカミキリムシについての情報には敏感にならざるを得ないわけです。

さて、林さんとはこのようなことで面識を持ち、以後いろいろな面で親しくさせていただきました。年齢的には大分離れており若造の私からは大先輩格の方ですが、いつも林さん、岸井さんと互いにさん付けで呼び合えたのは、呉服関係のお仕事もなさっておられた先生の暖かいお人柄にもよるもので、懐かしく思い出されます。

私が勤務していた京都の平安高校の生物教室の方には度々訪れていただき、そのころ生物クラブの研究課題でもあった、日本周辺の小島嶼を含む離島などの生物相調査の結果もたらされた多くの生物資料の中で、*Ceresium* ヒメカミキリ属や*Bumetopia* ウスアヤカミキリ属のものには特別関心を持たれ、後年八丈島産の后者の資料を用い校名を基に*Bumetopia heiana* ハチジョウウスアヤカミキリを記載されました。また私の標本中に埋もれていた、比叡山での夜間燈火採集で得られた、あまり見栄えのしないサビカミキリ類の一頭の標本を最初に見られた時は非常に驚かれ、是非研究させてくれと言われて持ち帰られ、後年(1959)新属新種の*Planeacanista japonica* トゲナシモモブトカミキリとして命名され記載されたことなど、研究者としての林さんを知るにつけ、深く敬愛する甲虫学者の一人としての存在が私の心に強く刻まれるようになりました。

昭和年代の終わる頃、大倉正文さんから電話を頂き、甲虫学会の常任幹事になってくれと言われたときは、とんでもないとお断りしたのですが、実は林さんの推薦だと言うことでむげにお断りもできず、仕事の上では何のお役に立つこともできぬと思うが、員数を満たす要員としてならと言うことで、本邦では最も歴史のある甲虫学会の本学会の幹事という、分不相応の立場に立つということになりました。考えてみれば50年ほど前に井の中の蛙大海を知らずの向こう見ずで林さんにお目に掛かったことが、その後の私の方向付けの遠因となったと思うと感慨深いものを感じます。数年前の学会の総会時、林さんが台湾採集行で採られたコメツキムシがあるので、一度見てくれないかとお話があり、またこれまでに蒐集した国内産の標本も若干あるので一緒にということで、喜

んでお引き受けしましたが、一度先生のお宅に伺わねばと思いつつ生来の無精者のせいで、とうとうご生前には責任を果たせずに至ったことが悔やまれます。半世紀前に大阪で産声を上げた昆虫学評論は、当初アマチュア主催の特に甲虫に関する英文専門誌として発足し、以後特に林さんと大倉さんたちのたゆまぬ努力により、継続的にその発展を見て現在に至りました。今では国際的にも高く評価される我が国を代表する学会誌の一つとなっています。その間、極めて多くの価値ある甲虫類に関する論文が掲載され、日本での甲虫研究発展に多大の貢献をなしてきたことは周知の通りです。その中で甲虫類に関する最近の多くの情報誌でも、相変わらずカミキリムシの人気は衰えていないと思いますが、これも林さんの存在とその論文に啓発されたのも主因の一つであろうと思います。

林さんたちにより育成されてきた「昆虫学評論」誌は、発刊 50年を一区切りと言うことで、第 51 巻から体裁を新たにし、更に新運営委員の諸氏により、今後も Coleopterology 発展の原動力としての機能を遺憾なく発揮していくと思いますので、林さんも安心して冥土のカミキリムシの Check-list 作成に邁進していただきたいと思っております。改めてそのご冥福をお祈りいたします。

(きしい たかし)

林 匡夫先生の思い出

奈良 一

1998年10月5日、先生の訃報を聞いた。あまりの突然な知らせに驚き、為すすべも忘れ、ただ茫然としたまま一日を過ごした。先生が入院されていたことは知っていた。しかしこれは毎年のことで、少し風邪でも引かれると、入院治療をされていた。それは奥様を亡くされてから、一人住まいのため、賄いが出来ないためと、用心のためで、秋から冬にかけて、毎年しばしば入院されていた。だから入院されてもそれほど大層には考えなかった。同年4月～5月に、10日間の日程で先生との例年の行事のようになっている、台湾への採集旅行に出かけた。台湾で先生の体のことをお尋ねした時も、「定期的に検査を受けています。その結果も、内臓は総て異常なしです。ただ腰痛がひどくて、歩行がやや困難なだけです。」とのお話であった。事実、台湾での採集は、総て自動車をチャーターして山へ入り、花のある所でストップして採集し、また、次の花で止まって採集するという方法で、殆ど歩くことなしで採集をした。その翌日くらいから、私が花を掬って捕虫網を差し出すと、花の下に坐りこまれて、網の中の虫を殺虫管に入れられた。その間に先生の網で花を掬い先生の所へ持って行った。これを繰り返して「これは能率がよろしい」と喜ばれた先生の笑顔が思い出される。帰りがけに、「来年も又採集に来ましょう」と言われた。日本に帰国後も、6月、7月に更に採集に自動車で出かけられた。だから私は、先生の持病は腰痛だけだと思っていた。また生命にかかわるような病気については、本人に知らされていなかったようで、先生ご自身も例年どおり軽い気持ちで入院されたようである。

1946年、終戦の混乱の中で、私は人を介して近畿甲虫同好会の結成を知り、早速入会したのが林先生とお近づきになった始まりで、その後、会合でお話を伺ったり、同定をして頂いたり、文献をコピーさせて頂いたり、年に一度くらいは拙宅まで出向いて頂き、標本を見て頂いたりした。しばしば私的な手紙の英訳をお願いもした。「貴方の英文は電報のようですね」と笑われたりしながらも、丁寧な英文で書いてくださった。先生の語学力は大したものので、英・仏・独・ラテン語などの文献は字引なしで読まれた。そしてその総てが、独学でマスターされたという。この努力は普通ではなく、最近ではロシア語にまで手を伸ばして勉強されていた。努力家の塊のような方で、博士号を取得され

たことは申すに及ばず、大学で外国人講師の通訳をされたと聞いている。外国語会話をどこでどのように勉強されたかは、ついにお尋ねする機会がなかった。ぜひ聞きたかった一つであるが、そのすべが永久になくなった。

私には特に親切にして下さった。大学では副学長の要職にあつて、毎日の激務のなかで私が伺っても快く会って頂けたし、同定も気軽に引き受けられ、標本や文献の閲覧はいうに及ばず、食事までご馳走になった。ここ数年前より、新種記載に際しては、私との共著という形で発表して頂いた。私が持参した新種に関しては、関連種の記載文コピーを下さり、「自分で記載文を書いてごらんさい。」と要領まで教えて頂いた。苦勞して作った英文もそのまま掲載されたことは少なく、多くは先生の添削を経ている。

先生は大変な美食家で、高級なフランス料理店や中華料理店へつれて行ってくださった。お酒をあまり召し上がらない先生が「日本酒の美味しい店」といって日本橋近くのさる小料理屋へ案内された。越後から取り寄せの日本酒は確かに大変おいしく、歌手中村美津子に似たおかみが作るおいしい料理とで、普段あまり飲めない私でも、ここではしたたか飲んだ。先生は海外からの帰りに、極上のブランデーを一本買い求められた。お宅に伺うと、ブランデーコレクションの中から、グラスに一杯だけ注いで下さった。毎年暮が近づくと、クリスマス用にと、どこで入手されるのか、フランス・シャンパーニュ地方産の本物のシャンペンを送って下さった。私の家ではクリスマスに家族たちとシャンペンを抜くのが恒例となっていた。今年からはそれが無い。奥様を亡くされてからは一人で炊事をされていた。ちょうど食事の最中に訪問したことがある。先生の一人で食べておられる食事の内容を見たところ、たいへん凝った献立だったので、私が「先生がご自分でつくられたのですか」と尋ねると、「毎日のことです」とこともなげに言われた。このようなグルメの先生と台湾の旅行をして、食事におつれするのにたいへん気を遣った。私一人ならばいつも屋台とか小吃店へ行くが、先生と一緒に時は高級店へ行った。それでも「この店はおいしくない」といわれたことがあり、二度と行かないことになった。雰囲気悪い店、汚い店には入ろうともされなかった。ある日、軽い昼食をと一軒の麵専門の店へ入った。ここの餛飩麵がたいへん気に入られて、以後何度も昼食に立ち寄ることになった。ところが翌年その店がなくなってしまって、先生はたいへんがっかりされた。替わりの麵の店をさがしたが、先生のお気に召す麵屋はついに見つけることができなかった。食事に関しては、たいへんむづかしい先生であった。

先生との思い出は尽きないが、先生の何気なく言われた言葉の中で私の心に強く残っていることは、「私は今でも昆虫のアマチュアをもって任じています。アマチュアでもプロには負けられないぞという意気込みが、私を育てたのです。」さらに「私は今でも天牛をコレクションする意欲は失っていません。ですから他のコレクターの方々には迷惑をかけません。コレクターの気持は良く知っています。」と、実に先生ならではの含蓄のある言葉である。しかし私たちにとって世界的な天牛学者を亡くしたことは事実である。お尋ねしたいこと、ご教示願いたいことが今でも山ほどある。残念でならないけれど、御冥福を祈るしかない。(なら はじめ)

林 匡夫先生の死を悼む

中村慎吾

林匡夫先生に、最後にお目にかかったのは1991年(平成3年)8月5日である。先生が関西自然科学研究会の中国路への自然探訪「山陰・道後山一三瓶山、高原のさわやかさに親しむ自然観察」の団長として、一行を中国路へ案内されたときである。私がこの自然探訪コースのひとつ帝釈峡の近く

に住まいしているのです、帝釈峡の案内を頼まれ、一日、峡谷を歩いたのが最後である。その折、奥様を亡くされ一人暮らしの身であったが、奥様を亡くされた悲哀を超越し、ライフワークの完成へ向けて強い情熱をお持ちであったことが印象に残っている。

ちょうどその年の3月、私は40年にわたる公職を辞し、毎日が日曜日となって少々生活にメリハリが薄れかけていた頃だったので、林先生が大学を辞され、一人暮らしの毎日の中でのことを淡々と語られたことからは、私に強い衝撃を与えずにはおこななかった。衝撃というと、私が林先生のご指導を頂き出してから5年目の1960年(昭和35年)、大阪船場の老舗の主人に「農学博士」という見出しで朝日新聞「時の人」欄に大きく報道されたときほど大きいものはなかった。

カミキリムシの研究で最初に学位を取得されたのは松下真幸博士(1899-1944)、その学位論文「Beitrag zur Kenntnis der Cerambyciden des japanische Reiches」が1933年であるから、林先生の学位論文「A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (1863) with special reference to ecological distribution and phylogenetical relation (Coleoptera : Cerambycidae)」は松下真幸博士に次ぐ27年ぶりの快挙であったから、私に強い衝撃を与えたわけであるが、それにも増して強い衝撃だったのは、松下真幸博士とちがい在野の一市井の人が成し遂げた業績だったからである。

朝日新聞に載った林先生のご風貌から、そのとき論語の「徳は孤ならず必ず隣あり」ということばが思わず私の頭をかすめ、野に在っても有徳有為の人物は必ず世に出るということを実感したものであった。その後、先生は老舗の呉服店をたたみ、大阪城南女子短期大学に招かれ教授にご就任されるが、保育科に学ぶ学生に幼児に対する自然教育の重要性を説かれ、具体的に虫や草木を教材にきわめて実践的な講義、実習指導をなされ、幼児の自然教育に大きな業績を残された。

このことはムシヤの中にはあまり知られていないことではあるが、林先生の有為な一面を物語っているといえる。また、関西自然科学研究会に長い年月にわたってかわり、自然教育、自然保護教育の普及に努められたことも林先生の有為な側面といえよう。

ライフワークの完成を待たずに死を迎えられた無念さは、いかほどのものであったろうか。それは想像を絶するものといえる。若い研究者も育てている現在、必ず、先生のご遺志を継ぎ、カミキリムシの研究は進展することであろう。そのことを信じてどうか安らかにお眠りください。謹んでご冥福をお祈り致します。
(なかむら しんご)

林 匡夫先生の思い出

岩田隆太郎

37年前の1962年。その頃私は小学校2年生で、大阪市阿倍野区の母の実家と大阪市天王寺区の父の実家を行き来する日々を過ごしていた。その1年前までヨーロッパで過ごした帰国子女であった私は、管理と形式を重視する日本の小学校教育にまったくなじめず、渡欧する前の幼稚園の時から興味を抱いていた昆虫、特に甲虫の魅力にますますのめり込んでいった。父母は、今から思えば、裕福とはいえないにもかかわらず教育投資に全く躊躇しなかったようで、こんな息子の様子を見て、当時としても安くはなかった保育社の原色図鑑シリーズを、第1巻蝶類、第2巻甲虫類、第3巻その他の昆虫類、第4巻貝類と、月1冊ずつ買い与えていった。

大阪市の市街地は、現在と比べればまだ自然が残っていたとはいえ、その昆虫相はベニシジミ、マメコガネ、ドウガネブイブイ、ナナホシテントウ、ヨモギハムシといった人為攪乱環境選好種がやはり中心で、たまに見るタマムシの姿に興奮したものである。一方、買い与えられた原色図鑑に

は、日本中の種が『どや、見つけられるもんなら見つけてみい』といわんばかりに並んでおり、世の中は広いものであるとの実感は、私においてはまずこの昆虫の多様性から得られたものであった。

小学校2年生の私は、こういった多様性に対して、今から思えば割とまともなアプローチをし、科という概念にすぐに慣れ親しんだ上で、科単位で種数を数え、当時解明が遅れていたゾウムシやハネカクシをさし置いて、まずカミキリムシに注目していった。これにはこの科の成虫の、あの異常に発達した触角、および最初の方に出てくるノコギリカミキリ亜科のいかつい姿やまことにこれ見よがしに着飾ったハナカミキリ亜科、さらには最後の方に出てくるハナカミキリに負けず劣らず着飾ったトホシカミキリ族の連中が寄与した。さらに図版にずらずらと並んだどれも同じ様な黄色い連中、すなわちヒメハナカミキリ属も気になる存在となった。なぜこんなに種類が多いのか、一体どこに行ったら姿を見られるかと、図版を見ながら溜息の毎日であった。

この部分の著者の名前、“林 匡夫”は、小学生の私には読めなかった。『なんかちょっと違うけど、一応“はやしくにお”と読んどこう』と。

大学生になった私は甲虫学会大会に参加しはじめた。『ああ、この人があの林先生か』と悟るのもまもなくのこと。さらに大学での植物学関係の卒業論文のために学部図書館の雑誌庫に入った私は、そこに「昆蟲学評論」のバックナンバーを発見、バラバラめくるとそこには、毎号あの林先生のカミキリムシ記載論文。目を見張った私は、これらの論文を経時的に読んでいったが、今読み返してみても、そこには戦後の日本のカミキリムシ相の解明の歴史が見られる。私が図鑑の図版を見て溜息をついていた頃に、若い林先生がどんな問題で頭を悩ませておられたかがわかり、思わず苦笑いしてしまうのである。

多大な業績の後、林先生が回帰されたのは地元のファウナ。大学院で甲虫関係の仕事をして、ようやく先生に一人前として認めて頂いた私は、関西甲虫談話会で水野弘造氏や大垣 誠(現在、前田誠)氏等と同じテーマでの調査活動を行い、これはとりあえず中間報告の形で1989年に日の目を見た(林・岩田・大垣：昆虫と自然、24(5):29-36)。

カミキリムシの分類の完備は、農林害虫防除研究に寄与する一方、環境多様性の点で重要な森林の指標昆虫の認識の点でも、その価値が指摘されつつある。林先生がそうした研究の展開を見届けられずに逝去されたことに、一抹の悲しみを覚える今日この頃である。(いわたりゆうたろう)

本学会会長であった林 匡夫博士の追悼文をお願い致しましたところ、多くの方々から貴重な写真とともに多数の記事を頂きました。それらを、本号と次号の二回に分けて掲載致します。(運営委員会)

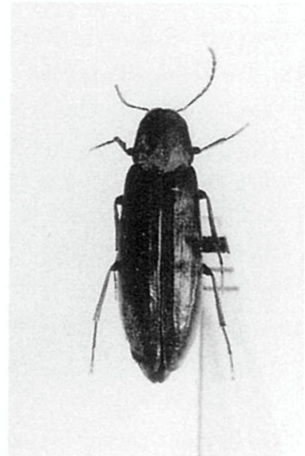
奈良県弥山産ナガクチキムシの記録

官能健次

〒510-1312 三重郡菰野町大字竹成 2180-6

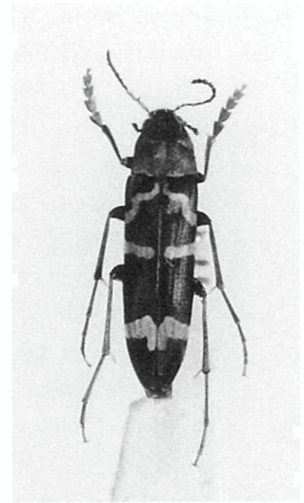
筆者は、東京在住の官能修司・久保和典両氏と共に、1997・98年に奈良県吉野郡天川村の大峰山系弥山を訪れる機会を得た。また1999年には単独で採集を行った。その時の採集品の中でナガクチキムシについて報告する。なお弥山産のナガクチキについては、既に水野(1987)が10種、奥田(1997)が14種を報告している。今回31種を得て、新たに15種を追加し合計数を34種とする事ができた。これは奈良県全体のナガクチキ産出種類数の半分以上を超えるが、弥山の標高、森林植生の素晴らしさを考慮するならば、今後の調査によって更なる追加が可能であろう。

01. *Hallomenus tokejii* NOMURA et KATÔ トケジヒメナガクチキ
1ex., 10.VII.1998 (官能健次).
ブナの太い倒木より採集.
02. *Holostrophus lewisi* CSIKI ヨツボシヒメナガクチキ
1ex., 15.VII.1998, 1ex., 16.VI.1999 (官能健次).
03. *Orchesia elegantula* LEWIS アヤモンニセハナノミ
1ex., 3.VII.1997 (官能修司).
04. *Orchesia imitans* LEWIS アカオビニセハナノミ
1ex., 3.VII.1997, 1ex., 5.VII.1997, 3exs., 16.VI.1999 (官能健次).
05. *Orchesia ocularis* LEWIS カバイロニセハナノミ
2exs., 3.VII.1997 (官能健次).
06. *Stenoxylita trialbofasciata* (HAYASHI et KATÔ) ミスジナガクチキ
1ex., 3.VII.1997; 5exs., 5.VII.1997 (官能健次); 3exs., 5.VII.1997 (官能修司).
尾根北側斜面の樹林内の朽ちて今にも倒れそうな立枯れ (直径約10 cm)を、何気なくピーティングして1頭がネット上に落下してきた。慌てて立枯れをよく見てみると、複数の個体が表面を這い回っていた。また、その上部の細い立枯れ木 (直径約7cmの樹皮がすべて剥がれ黒くなっている) から採集したが、最初にピーティングした立枯れの根元の地表からも得られたので、その時飛散した個体かも知ない。
07. *Dircaeomorpha validicornis* (LEWIS) ムツモンナガクチキ
1ex., 3.VII.1997 (官能修司); 2exs., 10.VII.1998 (官能健次).
林床の枯れ枝より採集.
08. *Phloiотrya bellicosa* LEWIS オオクロホソナガクチキ
2exs., 15.VIII.1997 (官能修司).
モミ立枯れの樹皮下より採集.
09. *Phloiотrya rugicollis* MARSEUL クロホソナガクチキ
1ex., 10.VII.1998 (官能健次).
10. *Phloiотrya obscura* (LEWIS) ビロウドホソナガクチキ
7exs., 3.VII.1997, 5exs., 16.VI.1999 (官能健次); 2exs., 3.VII.1997 (官能修司).
11. *Phloiотrya* sp. シコクホソナガクチキ (仮称)
2exs., 3.VII.1997 (官能修司).
官能修司氏によると、採集した時はビロウドホソナガクチキと思っていたので、どのような場所で採集したのか記憶にないとのことである。また、ビロウドホソナガクチキをすべて採集しなかった事が悔まれるとのことであった。
12. *Phloeotrinius femoralis* (LEWIS) モモキホソナガクチキ
1ex., 3.VII.1997 (官能修司).
13. *Enchodes crepusculus* (LEWIS) コメツキガタナガクチキ
5exs., 10.VII.1998 (官能健次).
ミズナラと思われる倒木に白色の菌が発生しており、この菌に集まっていたものと思われる。
14. *Mikadonius gracilis* LEWIS キスジナガクチキ
2exs., 3.VII.1997, 1ex., 5.VII.1997, 1ex., 16.VI.1999 (官能健次); 1ex., 5.VII.1997 (官能修司).

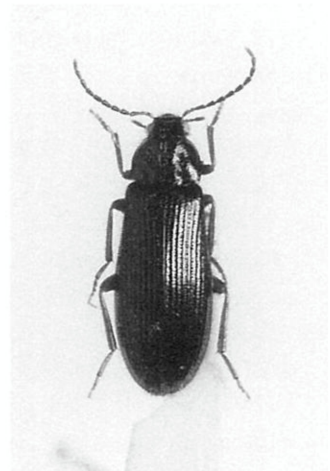


シコクホソナガクチキ

15. *Symphora atra* NOMURA ヒメナガクチキ
2exs., 5.VII.1997, 16.VI.1999 (官能健次); 2exs., 5.VII.1997 (官能修司).
16. *Symphora miyakei* NOMURA et HAYASHI ミヤケヒメナガクチキ
2exs., 3.VII.1997 (官能健次).
17. *Hira humerosignata* HAYASHI カタアカナガクチキ
2exs., 16.VI.1999 (官能健次).
18. *Euryzilora lividipennis* LEWIS ムナクボナガクチキ
3exs., 3.VII.1997, 3exs., 10.VII.1998 (官能健次); 3exs., 3.VII.1997, 2exs.,
15.VIII.1997 (官能修司); 3exs., 3.VII.1997, 1ex., 16.VIII.1997 (久保和典).
尾根沿いにあった蔓がしっかり絡んだ, 直径約40 cmのミズナラと思
われる倒木より採集した. 久保氏が最初に見つけたが, 振動を与える
事に依って, 隙間に隠れていた本種が次々と這い出してきたものと思
われる. また, 脱出孔らしきものも確認できた.
19. *Spilotus uninotatus* (PIC) カタモンセマルナガクチキ
1ex., 3.VII.1997, 4exs., 16.VI.1999 (官能健次); 1ex., 3.VII.1997 (官能修
司); 1ex., 3.VII.1997 (久保和典).
20. *Hypulus cingulatus* LEWIS ネアカツツナガクチキ
1ex., 16.VI.1999 (官能健次).
21. *Hypulus acutangulus* LEWIS トゲムネツツナガクチキ
3exs., 3.VII.1997, 2exs., 10-VII-1998, 2exs., 16.VI.1999 (官能健次).
22. *Ivania coccinea* LEWIS セアカナガクチキ
3exs., 3.VII.1997, 7exs., 5.VII.1997, 3exs., 16.VI.1999 (官能健次); 1ex., 5.VII.1997 (久保和典).
23. *Bonzicus hypocrita* LEWIS ボウズナガクチキ
1ex., 3.VII.1997 (官能健次).
ムナクボナガクチキが得られた倒木の細い枝部より採集.
24. *Melandrya gloriosa* LEWIS アカバナガクチキ
1ex., 16.VI.1999 (官能健次).
25. *Melandrya modesta* LEWIS ミゾバナナガクチキ
1ex., 3.VII.1997, 1ex., 5.VII.1997 (官能修司); 1ex., 5.VII.1997 (久保和
典).
26. *Melandrya dubia niponica* LEWIS オオナガクチキ
1ex., 3.VII.1997, 1ex., 5.VII.1997, 2exs., 16.VI.1999 (官能健次).
27. *Melandrya flavonotata* PIC ヨツモンナガクチキ
1ex., 3.VII.1997 (官能修司); 3exs., 3.VII.1997 (久保和典); 1ex., 16. VI.
1999 (官能健次).
28. *Prothalia ordinaria* (LEWIS) ヘリアカナガクチキ
1ex., 3.VII.1997, 2exs., 5.VII.1997, 5exs., 16.VI.1999 (官能健次); 1ex.,
5.VII.1997 (久保和典).
29. *Prothalia pictipennis* (LEWIS) イツモンナガクチキ
1ex., 3.VII.1997, 1ex., 16.VI.1999 (官能健次); 1ex., 5.VII.1997 (久保和
典).
30. *Prothalia rufonotata* (NOMURA) アカモンナガクチキ



ミスジナガクチキ



ムナクボナガクチキ

2exs., 3.VII.1997, 2exs., 16.VI.1999 (官能健次).

31. *Osphya orientalis* (LEWIS) アオオビナガクチキ

1ex., 5.VII.1997 (官能修司).

全国的には普通種と目される本種であるが、奈良県では従来、正確な記録を欠いており、上記が初記録とも思われる。

今回採集したナガクチキムシは、午前中はほとんど見られず、午後になってから採集した。なお今回の採集は6~8月の限られた時期だけであったが、シーズンを通じて採集すればもっと興味深い種が得られるものと思われる。筆者にとってナガクチキを狙っての採集は初めてであったが、幸運にも多くの種類を採集する事が出来た。今後も機会があれば、調査を続けていきたい場所である。

最後に、採集に同行し採集方法をアドバイスされ、データの発表を承諾された東京都在住の官能修司、久保和典の両氏、文献等でいつもお世話になっている生川展行氏、シコクナガクチキを同定していただき発表を勧められた水野弘造氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

水野弘造, 1987. 奈良県産ナガクチキムシ科甲虫目録. KINOKUNI (31) : 1-13

奥田好秀, 1997. 大峰山系弥山産のナガクチキムシの記録. ねじればね (76) : 9-10.

(かんのう けんじ)

長野県におけるタカオチビゴミムシの採集記録

北山健司

〒570-0034 守口市西郷通 4-13, 8-210

タカオチビゴミムシ *Paragonotrechus paradoxus* S.UÉNO は、東京都八王子市高尾山の地下浅層で得られた4個体の標本をもとに1981年に記載された、有眼有翅のチビゴミムシである。その後、東京都高尾山の薬王院、山梨県精進湖、静岡県黒法師岳、富山県小牧ダムでの採集記録があるが、非常に得にくい種であるようで、これら以外の記録は見い出せなかった。

筆者は最近、長野県松本市扉鉦泉において本種を採集したので報告しておく。



タカオチビゴミムシ

1♀, 23-V-1999, 長野県松本市扉鉦泉穴口沢 (標高1,100m), 北山健司採集

本種を採集したのは、穴口沢右岸側の小滝直下のテラスで、延長約50mにわたって大きな岩やこぶし大の石が混じった厚い堆積層が形成されている場所であった。このテラスの地中には、表面から50~60cm下層にこぶし大程度の石が重なり合ってきた大きな空間が形成されており、本種はこの空間にいたものと考えられる。

なお、本稿をまとめるにあたり、同定、文献、写真撮影等で芦田久氏に多大なご助力をいただいた。末筆ながら、ここに深く感謝の意を表する次第である。

参考文献

UENO, S.-I., 1981. J. speleol. Soc. Japan, 6 : 1-10

上野俊一・高野勉, 1990. Elytra, Tokyo, 18(2) : 174

(きたやま けんじ)

虫屋の広場(22)

地域別総合甲虫目録[VII]

◎県単位目録(追加)

[埼玉県]

01. 埼玉昆虫談話会(1999), 「埼玉県昆虫誌, 別巻」, 278PP. 鞘翅目: (訂正と追加); 11-28. (リスト); 111-165. [107科, 2826種]

1997 - 1998年, 「埼玉県昆虫誌」3巻4冊が発行されて, 驚嘆したのもつかの間, 訂正・追加を含めてこの度, 埼玉県産昆虫総目録として, 32目501科9360種が別巻として刊行された. 編集者は甲虫以外の昆虫に関しては各地でどの程度の目録作りがなされているのかわからないが, これは地方昆虫同好会の成し遂げた金字塔と言って間違いない. 関係者各位のご努力に対して, 惜しめない拍手を送りたい.

甲虫に限れば神奈川県レベルに到達するには, もう1,000種の追加が可能であろうから, 甲虫屋の手で総数10,000種を達成されることを望みたい.

◎区市町村単位目録・小地域目録(その4)

01. 新潟県長岡市
山屋茂人(1999), 長岡市周辺信濃川の甲虫群集, 長岡市立科学博物館研究報告, (34), 21-40.[29科, 247種]
02. 北海道根室市
釧路昆虫同好会(1999), 「根室半島の昆虫」, SYLVICOLA, 別冊 III. 鞘翅目: 伊藤勝彦ら3名; 51-70, 167-211. [59科, 502種]
03. 神奈川県愛川町
苅部治紀ら(6名)(1999), 愛川町の昆虫, 「愛川町郷土博物館展示基礎調査会報告書(8), 愛川町の動物」(愛川町教育委員会), 23-89. 甲虫目: 41-75. [72科, 1011種]
04. 北海道芽室町
伊藤勝彦(1998), 芽室町美生川流域における甲虫相(VII), SYLVICOLA, (16), 7-12. [5科, 52種], (合計)[21科, 378種]
05. 北海道足寄町
伊藤勝彦(1998), 足寄町上足寄で採集した甲虫(II), JEZOENSIS, (25), 49-54. [21科, 47種], (合計)[37科, 145種]
06. 岡山県新見市
青野孝昭(1998), 羅生門の昆虫-コウチュウ目・チョウ目-, 「羅生門自然環境保護・保全調査報告書」(新見市教育委員会, 235PP.), 145-186. [65科, 496種]
07. 埼玉県江南町
高橋 守(1998), 江南町の甲虫類, 「江南町史, 自然編1, 動物」(江南町, 323PP.), 45-50. 203-212. [32科, 233種]
08. 埼玉県嵐山町
豊田浩二(1998), 嵐山町の甲虫類(中間報告), 「嵐山町博物誌調査報告, 第3集」(嵐山町教育委員会), 35-46. [52科, 219種]
09. 埼玉県小鹿野町
長島武志・谷口正行(1992⇒1998), 合角ダム水没地域とその周辺の鞘翅目, 「秩父合角ダム水没

地域総合調査報告書[上巻]自然編, 263-277. [39科, 236種]

10. 埼玉県大宮市
斎藤良夫(1997), びん沼川の昆虫類, 「びん沼川調査報告(大宮市文化財調査報告, 第42集) 86-105. 甲虫目: 91-96. [26科, 103種]
11. 島根県大田市
福井修二(1994), 三瓶山の鞘翅類, 「三瓶山の昆虫相とその保全」(島根県昆虫研究会), 31-55. [64科, 544種]
12. 埼玉県日高町
日高町史編集委員会・日高町教育委員会(1991), 「日高町史, 自然史編」(日高町, 530PP.). 甲虫類: 斎藤良夫; 394-404, 506-509. [54科, 431種] (水野弘造)

虫屋の広場 (23)

ハネカクシ談話会関西支部の第2回採集会

梅雨時期にもかかわらず快晴に恵まれた1999年6月12日~13日, 京都府の芦生にて, ハネカクシ談話会関西支部の採集会が催された。12日の土曜日は, 大阪方面からの6名は演習林内のトロッコ道周辺で, 京都市内からの4名は佐々里峠と演習林内の杉尾峠付近で採集を楽しんだのち, 夕方5時に美山町の須後にある京都大学演習林事務所前に集合した。宿舎は京都大学の宿泊施設を格安で使わせてもらうことができた。翌13日はまず福井県境の杉尾峠の近くの筋斗(もんどり)谷に入る。ブナやミズナラの原生林が広がる絶好の環境で, *Nazeris* や *Lathrobium* などのハネカクシが落葉中から採集された。ハネカクシ以外でも, コホクメクラチビゴミムシ, ケムネチビゴミムシの一種(未記載種), ヌレチゴミムシ, ナガゴミムシ類などの興味深い地表性甲虫類が得られ, ヒメオオクワガタやオニクワガタの幼虫, ルリクワガタの成虫も得られたようである。午後は標高のやや低い, 櫃倉(ひつくら)谷に場所を変えた。美しい溪流沿いを遡上しながらの採集で, 河原では時期はずれのマグソクワガタも得られた。午後3時半, 全員が集合して解散となった。最後になったが, 演習林への入林許可や宿泊に関して種々手配していただいた京都大学の荒谷氏に感謝の意を表す。

(芦田 久)

会 報

採集会(1999年)の報告

和佐又山での採集会も本学会の行事として3回目、昨年に続き日本鞘翅学会との合同開催で、しかも7月10~11日とベストシーズンに設定したため合計参加者数43名という盛会となりました。Dr. Puthz 夫妻(ドイツ)をはじめ北海道や四国からの参加もあって、採集に精出す者もあれば久しぶりの再会に虫談話の尽きないグループもできて、差し入れのアルコールの空き瓶の数多きこと、深夜に及ぶ盛り上がりは留まることがありませんでした。

なお、採集会の成果を中心に和佐又山周辺の甲虫目録をまとめる編集作業を担当幹事のほうで進めています。600種余りの入力済みデータに当日早くも何種かの珍品データが追加され、来年の採集会を経れば、素晴らしい甲虫目録が日の目を見るのではないかと期待しています。採集会に参加できなかった方々でも和佐又山付近の標本をお持ちの人はデータ提供にご協力ください。(水野弘造)



発行：1999. 9. 30 日本甲虫学会
 (本部) 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付
 振替口座：00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>
 Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp
 昆虫学評論原稿送付先(英文)
 〒666-0116 川西市水明台 3-1-73 林 靖彦 Tel. 0727-93-3712
 E-mail: hayashiy@silver.ocn.ne.jp
 ねじればね原稿送付先(和文, メールでの投稿を歓迎します)
 〒611-0002 宇治市木幡熊小路 19-35 水野弘造 Tel.(Fax) 0774-32-4929
 E-mail: kzmizuno@oak.ocn.ne.jp
 〒614-8371 八幡市男山雄徳 8 E7-303 伊藤建夫 Tel.(Fax) 075-983-3491
 E-mail: itokyoto@gb3.so-net.ne.jp
 入会及び会費問合せ先(年会費5,000円, 入会金は不要)
 〒590-0144 堺市赤坂台 1-18-5 野村英世 Tel. 0722-98-4066